生野高校
77期 2年

学年通信 悉しつう有

第42号（2023年11月10日）

大阪府立生野高等学校
大阪府松原市新堂１－552
072-332-0531(学校代表)
072-332-**0712**(学年直通)

【学年通信は保護者の方にも見せてください】

◆それがどういう意味を含んでいるのか。

ある言動について、それがどういう意味を含んでいるのか――それらを意識することが、発信する側・受け取る側ともに、現代の日本の社会ではかなり希薄になってきていると私(高崎)は感じています。

その日に、その場所で、その人たちがいる状況で、その言葉（フレーズ）を使って、その服を着て、そのマークを身に着けて、その仕草を伴って――ある事について発信するという言動が、どういう意味を含んでいるのか。どういう歴史の地層の上に立った発信であるのか。現代日本では随分と軽視されてきているように思います。言葉が軽いとか、発言が空虚だといった印象を持つ場面に遭遇したとき、決まってそれらは、当該の言動が当事者に関する事象の積み重ね（歴史の地層）と結び付いていないものなのです。

ちゃんへんさんを招いての、10/12(木)の人権講演会。自身の夢を実現するために渡米したい。そのために韓国籍を取得したい。しかしその言動は、在日コリアンの人たちが背負ってきた歴史観＝朝鮮半島は１つの国であり、南北分断は肯定できない――に慮ることが出来ていないものだった訳です。日本で生まれ育ち、当時、中学生であったちゃんへんさんがその点に思い至らなかったとしても、それは無理からぬことだったのでしょうが。

どちらかを選ぶ＝２つの国家に分断しているという前提そのものを認めることになる。思い至らなかったとしても、その選択は、ちゃんへんさんのおばあさんたち（在日１世）が背負ってきた歴史観（アイデンティティと言ってもいい）を踏みにじる言動だった訳です。お母さん（在日２世）はそのことに思いが至っていたからこそ、頭を下げに行った訳です。体育館で講演のこの部分を聞いたとき、かなりの人が、思いもよらない…でも言われてみればそうやんな――と気付かされたのではないでしょうか（私もその一人です)。渡米後のちゃんへんさんの修行っぷりも聞いてみたいところではありましたが、きっと“自分は何も分かっていなかった、すまないことをした”という気持ちをバネに、研鑽を重ねたのでしょう。

「“何が差別にあたるのかを知らない”ことが差別を生む」ということを、昨年 11 月の人権講演会の内容を受けて、学年通信（第 14 号・11/17 発行）に書きました。「全ての人の全ての経験を、自分が経験することはできないが、他人の経験を知ることで、経験していない、あるいは自覚していないことを自分のなかに取り込むことはできる」とも書きました。自分は在日コリアンではないから今回の話は自分に直接は関係ない――ではなく、ちゃんへんさんの気付き・経験を聞くことで、物事の見方・とらえ方の一つを自分のなかに取り込む機会を得たのです。祖国から離れて暮らす人たち、また、今も分断が横たわっている祖国を見つめる人たちが、どんな思いを抱え、どんな目で見ているのか。例えばウクライナ、例えばパレスチナ。新たに獲得した見方・とらえ方で周りを見渡せば、きっと今までとは違った姿が見えてくるはずです。物事の見方・とらえ方は無尽蔵で、これからも次々と新たな切り口が現れることでしょう。現代的な課題であっても、そのヒントが過去に示されていることは数多くあります。私たちは例外なく過去からの延長線上に立っており、さらにその延長線上にこれからの姿を描きます。過去と断絶して現在を理解し、評価することなど決して出来ませんし、そのやり方はきわめて粗雑にして危険です。どのような来し方があっていま私たちがいる世界の姿となったのか――それらを自分に内包することではじめて、望ましい行く末を描くことが可能となります。古典や

歴史・思想・文化など、人文科学を学ぶ意義はまさにここにあると言えます。

ところで、分断が横たわる朝鮮半島の姿を忸怩たる思いで見つめている――おばあさんたち（在日１世）が、なぜそんな経験をせねばならなかったのか。その原因はどこにあるのか。換言すれば、“誰のせいなのか”――今回の講演の趣旨から逸れるので、ちゃんへんさんは決して語りませんでしたが、思い至らなかった筈はないでしょう。そうした話は、きっとおばあさんからも聞いていることでしょう（そして運動会のエピソードにつながります）。直接的には、第二次世界大戦後に朝鮮半島の分断をもたらした冷戦構造の当事者・アメリカとソ連。また、朝鮮半島の南北双方の指導者層。しかし、そもそも朝鮮半島にその前提をつくり上げた日本が無関係なはずがありません。在日コリアンの人たちが背負ってきたものの解消に、日本の政府や社会がどこまで責務を果たしてこられたのか。日本政府に責任ある役割を担うよう、どこまで市民が迫ることができたのか。「解決すればいいなと思います」という“自分ではない誰かの話”なのではなく、「日本政府に責任ある役割を果たすよう私たち自身が求めているか」という“自分事”の話なのです。こうした見方・とらえ方からこの問題を見つめたならば、さらに新たな姿が目の前に現れてきませんか。

今回の講演では、ちゃんへんさんが生まれ育った宇治市のウトロ地区のことが語られました。ウトロの成り立ちについても今回は語られませんでしたが、大阪の学校で、「生野」の名を冠していることもあり、生野区のコリアタウンのこと、そして大阪には済州島にルーツを持つ人が多く集まっている話も聞くことが出来ました。

そのコリアタウンについて、2023 年４月に「大阪コリアタウン歴史資料館」が開館しました。生野区のコリアタウンのメインストリート（御幸通）から北へ路地を入ったところにあります。御幸森小学校が閉校されたことを受け、在日コリアン関連の資料の散逸を防ぐとともに、その歴史をたどる拠点として設けられました。コリアタウンがどのように生まれ、移り変わって現在の姿となったのかについて知ることが出来ます。また、大阪に済州島出身者が多く暮らした経緯については、『焼肉ドラゴン』で知ることが出来ます。劇作家・鄭義信さんによる日韓共同制作の舞台で、2018 年には自らがメガホンを取って映画化しています（日韓で公開）。実話をもとにしたストーリーで、高度成長期の大阪と豊中・伊丹空港周辺に暮らす在日コリアンを描いており、主人公の金龍吉が、1948 年の四・三事件で故郷の済州島から逃れて大阪へ辿り着いたことを作中で語っています（四・三事件のことは、ちゃんへんさんの話にも登場していましたね）。

この講演を通じて、ウトロのことを知りました。1980～90 年代のウトロの暮らしのことを知りました。大阪に関する、知るためのヒントも示されました。在日コリアンの人たちがどんな思いを込めて朝鮮半島情勢を見ているのか、どんな経緯があって日本で暮らしているのかを知りました。先述の学年通信第 14 号で書いた通り、知は蓄えることで繋がりが見え、知の繋がった見え方は自分に新たな気付きをもたらします。みなさんは物事の見方を新たに獲得したのです。

また、「好きなことで一番になりなさい。そのための努力をしなさい」という、おばあさんの言葉がちゃんへんさんを後押しし、ちゃんへんさんもまた、その言葉で自分自身を後押ししてきました。渡米後の話についても、もっと聞きたかったと私は感じています。「好きなことで一番になる」ためには、「好きなこと」だけをやっていればいいという訳ではなかったはずです。「好きなこと」をやり続けるためには、やり続けられる環境を自ら作り出さねばならず、そのために「決して好きではないこと」にも向き合ってきたはずです。

「好きなこと」をやり続けるために、ちゃんへんさんがどうしてきたのか――これもまた実に興味深いところです。